

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
に貢献できるか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🏠

Room2203(Education and research building block2 2F 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Koji Takahashi

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

[学校保健体育-B-01]

エージェンシー概念の実践化プロセスの解明（教,政）

中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*Kohei Kusatsu¹ (1. Ikisa elementary school)

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[学校保健体育-B-02]

定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果（教）

*Riko Isogawa¹, Yohei Hamagami², Shohei Kurita² (1. Osaka University of Health and Sport Sciences Graduate School, 2. Osaka University of Health and Sport Sciences)

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

[学校保健体育-B-03]

共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究（ア）

*Kiyokatsu Watahiki^{1,2} (1. TOKAI Univ., 2. MEISEI Univ.)

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
に貢献できるか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 🏠
Room2203(Education and research building block2 2F 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Koji Takahashi

3:30 PM - 3:50 PM JST | 6:30 AM - 6:50 AM UTC

[学校保健体育-B-01] エージェント概念の実践化プロセスの解明（教,政）
中学校保健体育教師が直面した課題に着目して

*Kohei Kusatsu¹ (1. Ikisa elementary school)

OECD “Education 2030”で提唱された「エージェント」は、未来を見据えた学びの方向性として衆目を集めている。だが、体育の授業においてその概念がどれほど実現されているかについては、現場レベルでの導入には依然として困難が伴っている。本研究では、中学校保健体育におけるエージェントの実践化プロセスを明らかにすることを目的に、同概念に初めて触れた3名の教師に対し半構造化インタビューを行い、SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて質的分析を行った。

その結果、教師たちは共通して、①エージェントを抽象的かつ難解なものと捉えながらも、②既存の実践と接続可能な点（AARサイクル、役割分担、権限の譲渡、振り返り等）を手がかりに導入を試み、③一部の生徒における変容を通じてその意義を実感していた。さらに、教師自身も授業実践を「言語化」する過程で、エージェントの再解釈と授業構成の再設計に至るなど、受容・適用・再構成のプロセスを歩んでいた。

本研究は、教育概念の実装において「教師自身の納得解の獲得」や「既存実践との媒介的接続」が重要であることを示唆する。今後は、教師の現場知を尊重しつつ、教育概念の「翻訳」と「内在化」を支援する仕組みの構築が求められるだろう。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
に貢献できるか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍
Room2203(Education and research building block2 2F 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Koji Takahashi

3:50 PM - 4:10 PM JST | 6:50 AM - 7:10 AM UTC

[学校保健体育-B-02] 定時制高等学校の体育授業における協同学習モデルの効果 (教)

*Riko Isogawa¹, Yohei Hamagami², Shohei Kurita² (1. Osaka University of Health and Sport Sciences
Graduate School, 2. Osaka University of Health and Sport Sciences)

協同学習とは、協同的な相互依存性の学習状況への促進作用を利用することを意図した指導法
であり(栗田、2015)、小グループを活用して自分と他者の学びを高めるものである(ジョン
ソンほか、2010)。協同学習モデルを適用した体育授業では、運動・認知領域に加え、特に情
意・社会的領域への効果が高く、安定して機能するとされる(栗田・大西、2023)。

定時制高等学校(以下、定時制高校)は、勤労青年のみならず、中途退学者や不登校経験者、
発達障害等の特別支援が必要な生徒など、多様な学習ニーズに応じた教育機関としての役割を
担っている(文部科学省、2020)。学び直しや自立支援が期待される一方で、定時制高校の生
徒はコミュニケーションスキルに不安を抱え、対人恐怖心性を持つことが指摘されている(堀
田ら、2017)。

対人関係に課題がある定時制高校の生徒に対して、情意・社会的能力を育む協同学習モデルを
体育授業に導入することは有益である可能性が高い。しかし、体育授業における協同学習の実
践研究は多くが小学校段階を対象にしたものであり、中学校以降の校種、特に定時制高校での実
践は少ない。

そこで本研究は、ある地域の定時制高校2年生10名(男子6名、女子4名)を対象に、協同学習
モデルを適用した7単位時間のハンドボールを素材とした球技領域・ゴール型の授業を実施し、
その効果検証を目的とした。授業は保健体育科の教員3名(男性2名、女性1名)によるチーム
ティーチングにて行われた。

データは①形成的授業評価法(高橋ほか、2003)、②主張的・認知的共感性尺度(倉盛、
1999)、③学級適応感尺度(江村・大久保、2012)の質問紙調査から得た量的なものに加え、
④授業者、生徒に対する半構造化インタビュー、⑤フィールドノート、⑥授業映像による質的
なものを収集し、それぞれの分析結果をもとに複合的に考察した。結果等の詳細は発表時に示
す。

Oral (Theme) | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
に貢献できるか

📅 Wed. Aug 27, 2025 3:30 PM - 4:30 PM JST | Wed. Aug 27, 2025 6:30 AM - 7:30 AM UTC 📍

Room2203(Education and research building block2 2F 2203)

[1a901-03] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表①

Chair:Koji Takahashi

4:10 PM - 4:30 PM JST | 7:10 AM - 7:30 AM UTC

[学校保健体育-B-03] 共に学び共に育つインクルーシブ体育の因子に関する研究 (ア)

*Kiyokatsu Watahiki^{1,2} (1. TOKAI Univ., 2. MEISEI Univ.)

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編体育編（2018）では、改訂の要点として「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する視点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」と示されており、共生社会の実現へ向けた保健体育科の果たすべき役割として、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が含まれている。ここでは、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が例示されていることも注目すべき事柄だと言えるが、共生社会の実現へ向けて、学校体育の果たすべき役割は大きい。そこで本研究では、多様な児童生徒が共に学び共に育つインクルーシブ体育の実現へ向けて、多様な学習者が相互に学び合い、観点別評価にも応用可能な体育授業の自己評価尺度を開発することを目的とした。

研究方法は、202x年1月～2月の期間において、A県の高等学校2校の生徒（N=414）を対象に梅澤・村瀬・坂本（2021）などの先行研究を基に作成した30項目について5件法（5：当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらともいえない、2：あまり当てはまらない、1：当てはまらない）による質問紙調査を実施し、回答を得た。分析方法は、探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した結果、合計2因子が抽出された。これらの因子は、第一因子（ $\alpha=.958$ ）を「共に学ぶ因子」、第二因子（ $\alpha=.947$ ）を「共に育つ因子」と命名した。次に、抽出された2因子についてMann-WhitneyのU検定にて両校の得点を比較した結果、0.1%水準で通常の高等学校よりもインクルーシブ推進校の方が有意に高い傾向が確認された。なお、本研究は明星大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。